

「結婚差別の社会学」 著：齋藤直子

この本を選んだのは、人権相談の中で、部落差別による結婚差別のケースに出会っていたということもあって、手に取りました。

私にとっては、厚めのしっかりした本で、しかも「社会学」と書かれていて、難しいイメージがあったが、ほとんどが聞き取りを元に書かれているので、すごく読みやすかった。

私が相談の対応をする中でも、差別によって「籍を抜きたい」とか、「破談にしたい」などの相談もあったので、結婚差別の現状はかなり厳しいと感じていた。

本を読んで、本当に結婚差別でも多様な事例があることに驚きました。その中でも、差別する側の意識の多様性や差別と向き合い、一緒に乗り越えようとする家族や恋人の姿は、本当に心強かった。

2012年の同和地区のアンケートでは、約1割弱のケースが破談になっているという現実にはショックを受けたが、逆に9割のケースが進んでいるということに感激した。しかし、結婚しても、結婚した相手にも家族にも言えないままの生活を送る人もいるし、結婚はできたけれども、家族に周囲に告知しない事などを条件に結婚できてケースなど、結婚ができて、喜ぶ状況ではないケースなどもあり、今後の支援体制の必要性についてまとめられていた。

2016年12月には「部落差別の解消の推進に関する法律」が施行されましたが、その中でも、相談体制の充実が目的の部分に記載されているなどからも、相談と支援体制を充実して行かないといけないと、改めて思いました。

